

放亀の地名

赤穂市有年

有年の榎原に伝わってる話です。榎原の千種川沿いに放亀というところがあります。ここは一年に何度も洪水にみまわれ、お百姓さんたちが植えた稲の苗が流れてしまふところでした。

江戸時代のころです。榎原のお百姓さんは「アア。今年はこれで三度目じゃ」と、毎年天をみあげて、ため息をついたものでした。いつまでもため息ばかりついておれませ

ん。早く苗を植えかえて稲を作らなければ、食べていくことも、領主に年貢を納めることもできません。洪水にもめげずに、一生懸命働きました。しかし、榎原のお百姓さんは、朝早くから、日がつぶりと暮れるまで働きつづけても、やっと生活ができるような貧乏な暮らしをしていました。

ある年のことです。この年も何度目かの洪水にみまわれ、稲が流されてしまいました。いつものように、苗の植えかえをしていると、足元で何かがゴソツ、ゴソツと動いています。お百姓さんは気持ちが悪くなって、場所をかえました。でも、しばらくすると、また足元がゴソツ、ゴソツと動くのです。足元の泥をのけ

てみると、そこに一匹の亀がいました。亀は泥にまみれて、もがき苦しんでいたのです。

「よっしゃ、よっしゃ。じっとしとけよ。

今すぐに助けたるからな。じっとしとけよ」

お百姓さんは、手に持っていた苗を置いて、亀を抱きあげ、千種川の水で洗ってやりました。

「もう泥田に入るんじゃないぞ。はよう、

元気になれよ」

と、亀に語りかけ、放してやりました。亀は両手・両足をバタバタと動かし、まるで喜んでいのように泳いでいったそうです。亀の姿が見えなくなると、お百姓さんは、また田にもどって、苗の植えかえに精を出しました。

次の年も、その次の年も、榎原は洪水にみ

まわれました。でも、いつもと少し違うことがありました。上流から押し流されてくる土が、それまでとは違い、とても肥えた豊かな



放亀の光景(赤穂市有年榎原)

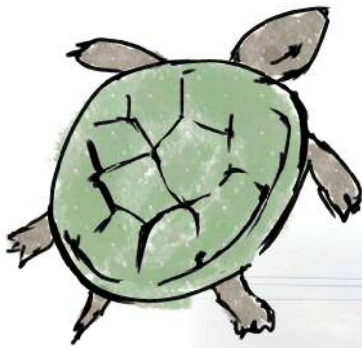
土であったのです。そこに植えた稲は、今までの倍以上の実がつけました。洪水が運んでくる土のおかげで、榎原では豊作が続き、お百姓さんたちの生活は年々豊かになっていきました。

そのうち、誰れということなく

「亀を助けたからとちがうか」

「亀の恩返しやで」

と、口ぐちに言い出しました。そして、亀を放してやった場所を「放亀」と呼ぶようになったということでした。



放亀の光景(赤穂市有年榎原)